

油彩

(テンペラ併用)

朽ちた果実(ペーパー・コラージュを描く)②

二浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1953秋田 東京女子大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画とエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼現
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在(96
 5.97) 春陽会会員

■絵を描くということ③

—テーマとモチーフ—

前回は、表現とは何かということとを述べました。

ところで、この表現というものは、「何を」、「どのように」という二つの要素があります。この講座ではまず、「どのように」という問題すなわち材料と技法のことを先に考えてきました。

ともすれば、「どのように」という方法論に専念した方が、結果が明確に現れるため、私たちはこの問題の



(図1)「婦人像」上エジプトのエル・ファイユーム出土。2世紀頃。板にエンコースティックで描かれている。ローマ統治下のエジプトで、きわめて写実的な肖像画が作られたが、これはエジプトのミイラ作りの技術から派生したものである。板絵の他に壁画にも使用されたが、熱した鍍金を当てることによって、平滑に仕上げられると同時に蠟が壁に浸透し、たいへん堅牢な状態になっている。

みに向かいがちになります。しかし、どんな難しい技法であろうと、何十年も続けていれば、ある程度の専門家になります。「上手な絵」を描くことはできるのです。

しかしこれでは、単なる工芸品でしかありません。すばらしい絵とは、こんな絵ではありません。やはり「何を」ということが表現の核心なのです。

この「何を」というのは、いわゆるテーマ(独 theme)とモチーフ(仏 motif)のことです。ど

ちらも主題と訳し、人に行動を起こさせる内部的な衝動、動機という意味です。しかし、私たちは通常、テーマはより内的な動機、モチーフは外因的なものとして使用しています。

例えば、「自然保護をテーマ、モチーフには森の木」というように、作品の中心となる思想内容をテーマ、その内容を表すために用いる、より具体的な事物をモチーフと呼んでいるのです。

このテーマやモチーフをどのようなものにするのかということは、絵を描く上で、出発点でもあり到着点でもあるのです。そして、これらは全く個人的な問題ですから、一般論として簡単に述べられるものでもありません。しかし、唯一つ、外してはならないものを挙げるとすれば、それはやはり「感動」しかありません。

■感動について

私たちが絵を見て感動を受けるの

は、画家が何かに心を動かされ、それを伝えようとする思いが画面に現れているからです。すなわち、優れた作品は、描いた本人が感動しているのです。

画家というものが、優れた作品を連続して制作できる者であるとすれば、画家は常に感動をしていなければなりません。しかし、毎日が感動の連続ということは、まずありえないでしょう。

若い時は誰でも、どんな些細なものにでも感動できますが、だんだん歳を重ねるごとに、ちよつとやそつとでは感動できなくなっていくます。また、どんなに感動的なものにも、しばらくすれば慣れてしまいます。

例えばどんなに美しい風景でも、そこに住んでいる人は感動などしませんね。ましてや、この情報氾濫の今日、世界中の美しいもの、すばらしいものを居ながらにして見ることで溢れる私たちは、大概のことには慣れて

しまっています。

では（若くもない？）私たちには、感動を伴う絵を描くことはできないのでしょうか。

実は、この感動という言葉に落とし穴があるのです。

たとえば、風光明媚な観光地に行つて、「絶景かな！」と感動したとします。そして、この感動を伝えようとして、この風景画を描いたとします。

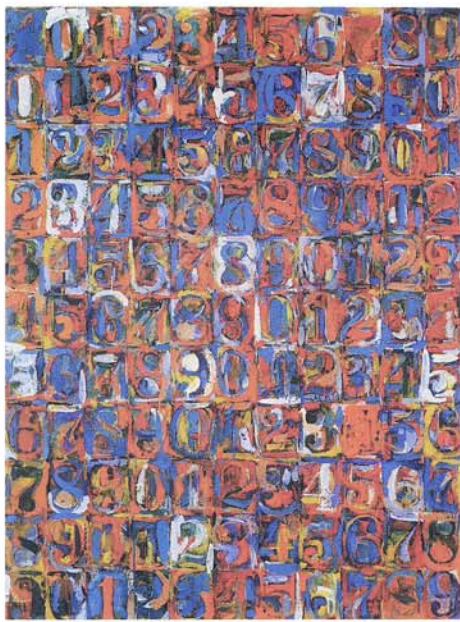
どうでしょう、絵はその感動がうまく表現できるでしょうか。多分、ほとんどの人はかなわないはずで、上手に描けば描くほど、だんだん観光地の絵葉書になってしまいます。まさに、「トク」絵にも描けない美しさ

」なのです。

このような絵は風景を再現したものに過ぎなく、本物に太刀打ちできるはずはありません。感動したのは風景そのものに対してであり、コピーである絵や絵葉書の写真がそれと同じ感動を与えることなど、絶対にあり得ないのです。

また、世界中の美術館の肖像画を集めたとします。さて、この中に絶世の美男、美女は何人いるでしょうか。おそらく、限りなくゼロに近いはずで、（個人的な趣味もあるでしょうが……）。これも、昔日の巨匠がモデルの美しさに魅せられて描いたわけではないからなのです。

つまり、絵を描く上での感動とは、



（図2）ジャスパー・ジョーンズ「Numbers in Color」現代のエンコースティックの作品。ジャスパー・ジョーンズの作品の多くは、このエンコースティックや油彩などの併用で描かれている。

このよう
な、美し
いとか、
悲しい、
楽しいな
ど、直接
的に感情
を揺さぶ
られるこ
とは異
なるもの
なのです。

もちろん、感情的な感動が引き金になることは当然あり得るのですが、必要充分条件ではないということなのです。では、絵を描くための感動とは何なのでしょう。

私は、これは「発見の喜び」だと思っています。絵を描くということとはとても個人的な行為ですから、普遍的なものだと言いつつもやはりありませんが、少なくとも、私にはこの発見が絵を描く最大の原動力になっています。

先の風景画などの場合、漠然とした「美しい」、「凄い」という感情だけでは、絵が描けないのです。何かを発見する必要があるのです。例えばその景色の中の、一本の樹木でも、じつと見つめていると、そこに、これまで思いもよらなかった何かを見つけることだってできるのです。それを発見した時、きつと絵を描く情熱が溢れ出てくるでしょう。

肖像画にしても同様です。絶世の「美女」は誰が見ても「美女」で、発見ではありません。モデルのうわべの形態のみに眼が向いている限りは、決してすばらしい作品とは言えないのです。巨匠と言われる画家たちの眼差しは、むしろ、人間の内的

な美醜や陰の部分に向かっているのです。そこに彼らの発見があったのです。

そのため、某フィルム社のCMを拝借すると、「美しい人はより醜く、そうでない人はむしろ美しく」描かれていたりするのです。そしてその結果、いわゆる絶世の美男美女の肖像画など、美術館には存在しなくなるのです。

では、このような発見はどうしたらできるのでしょうか。これについては、次回に廻しましょう。

■朽ちた果実の制作

これまで、シルバー・ポイントでの描画を行ってきました（制作過程4、5）。さらに、他の素材を併用していきますが、今回はエンコースティック（※注1）を使ってみます。

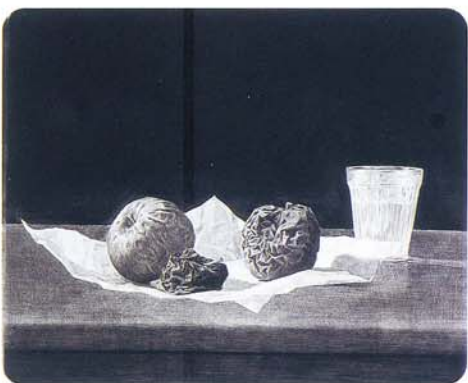
エンコースティックとは、蜜蠟をメデイウムとした絵具で描く技法で、「蠟画」とか「焼付け絵」と訳されています。これは、蜜蠟を焼いた鋳て展ばしていくため、古代エジプトまで遡る最も古い絵画技術の一つです。詳しくは、また別の機会に書きたいと思しますので、ここでは簡単に紹介しておきます。



(制作過程6)
背景にエンコースティックの黒を塗る。



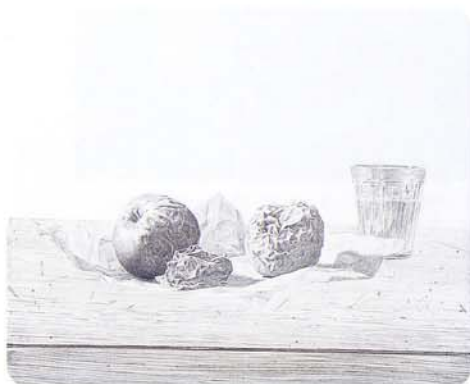
(制作過程7)
背景のエンコースティックをアイロン鍋で溶かしながら展はす。



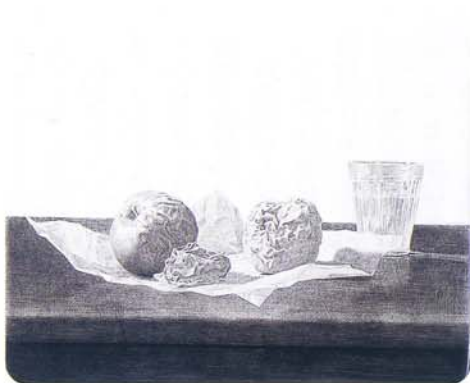
(制作過程8)
リンゴの暗部を描き加えていく。



(図3) 蜜蝋 左；未晒しの蜜蝋。右；晒した蜜蝋。
油彩画では、絵具やメディウム、ワニスに使用される。絵具には盛り上げ表現のために添加されているが、メディウムやワニスにはつや消し効果のために含まれる。湯煎したテレピンに溶解する。



(制作過程4)
前までの制作



(制作過程5)
テーブルを描いていく。

蜜蝋は、たいへん耐久性があり、保護力にも優れた絵画材料なので、現在は絵画の表面保護や修復などに使用されています。しかし、絵具のメディウムとして盛んに用いられたのは、古代ギリシア、ローマ時代から中世までで、9世紀以降はあまり用いられなくなりました(図1)。

16世紀と19世紀の一部で復活しましたが、その後はまた衰退していきます。しかし、近年、またその魅力が再認識され始め(図2)、アメリカの絵具メーカーでは製品化しています(※注2)。

■エンコースティックで描く

蜜蝋は、ミツバチの巣から蜂蜜を搾り取った残りを、熱して溶かして採取します(図3)。種類にもよりますが、60℃〜70℃で溶解し、冷めるとまた固まります。したがって、温めながら描き(※注3)、描いた瞬間に固まるというのが、最大の長所でも短所でもあるわけです。絵具は、この溶解した蜜蝋に顔料を混ぜて作ります。今回はモノクロームで描いていますので、黒鉛を使いました。はじめに、ランダムにエンコースティックの黒を乗せていきます(制

蜜蝋は、たいへん耐久性があり、保護力にも優れた絵画材料なので、現在は絵画の表面保護や修復などに使用されています。しかし、絵具のメディウムとして盛んに用いられたのは、古代ギリシア、ローマ時代から中世までで、9世紀以降はあまり用いられなくなりました(図1)。



(制作過程10)
モチーフの暗い部分にもエンコースティック黒を薄くかける。
この後、テーブルのキズなどの細部を描き込み、再度アイロンをかけて整え、サインを入れて完成。



(制作過程9)
背景に塗り残しができたので、もう一度エンコースティック黒を塗る。ガラスを更に描き込む。



(完成図) Paper Coffin (F8)

木質繊維合板にカオリン地、シルバー・ポイント、水彩、エンコースティック

(※注1) encaustic (英)、encaustique (仏)。「アンコスティク」はフランス語読み。

(※注2) R&F Handmade Paints, inc. <http://www.rfpaints.com/>

(※注3) 温度を一定に保つために、サーモスタットの付いたウオーマーが便利。家庭用のホットプレートでも代用できる。これを100℃以下の温度にセットする。高温になると、煙を上げて沸騰するので注意する。

作過程6)。この後、鍍状のアイロンか、小型のものを使い、再溶解させて展ばしていきます(制作過程7)。筆で展ばすには、ヘアー・ドライヤーの温風を当てながら展ばしていきます。

この黒に合わせて、全体のバルールを整えます。この時、マチエールの統一を図るため、明るい部分にも蜜蝋のみ(顔料の入っていない)を塗布しておきました(制作過程8、9)。

最後に、もう一度アイロン鍍でエンコースティックを展ばしながら整え、細部を描写して完成です(制作過程10)。

この作品は、全体が蜜蝋で覆われていることとなります。先に述べたように、画面の保護層としては優れた素材ですので、フキサチーフやワニスなどは必要ありません。このままで、千年、二千年単位での耐久性があることとなります(…のはずす)。

また、表面を布などで擦ると、柔らかな光沢が得られます。